

「朝も夕も主は働かれる」

マタイによる福音書 8:14-18
詩篇 121:4-5

2025年10月5日
野村 友美 師

<疲れてしまう私たち>

「お疲れ様」と、私たちは日常的に挨拶します。

本当に、日々生きていくのはなかなか大変ですから、ほとんどの方が何かしら疲れを感じておられるだろうと思います。みなさん、お疲れですか？

忙しかったり、大変なことがあったり、何かを頑張ったりすると、私たちは疲れを感じます。「24時間働けますか」なんていうコマーシャルが昔ありましたが、24時間起きているだけでも、けっこうなダメージが体に残りますよね。そう、私たち人間は誰も、休みなく働き続けることはできません。どんなに楽しいことをしていたとしても、どんなにやらなきゃいけないことがあっても、休まないでいたら、いつかは倒れてしまうでしょう。だから今日の聖書の物語を読むと、私はちょっと心配でドキドキします。

24時間とは言いませんが、昼も夜もイエス様は人々を癒し続けておられます。「お疲れ様です、大丈夫ですか？」と思わず声をかけたくなるぐらい、この時のイエス様は結構なハードワークをなさっているんです。

もちろん、福音書の他の箇所では、イエス様もちゃんと休んでおられます。

私たちと同じ人間の体で生きておられたんですから、イエス様だって休まないで疲れ切ってしまったでしょう。じゃあどうして今日の物語は、こ

んなにハードに働くイエス様の姿を私たちに伝えているのでしょうか。

それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためだった。そうマタイの福音書は説明しています。

「彼はわたしたちの患いを負い、
わたしたちの病を担った。」

イザヤ書53章がうたう「苦難のしもべ」、神様の憐れみと癒しを背負って遣わされた御方こそ、私たちの主イエス・キリストだ。そう宣言するために、マタイの福音書は今日のイエス様の姿を描いているんです。

<ペトロの姑>

イエス様がペトロの家に行くと、ペトロの姑、つまりペトロの妻の母親が熱を出して寝込んでいた。そんな言葉で、今日の場面は始まっています。

イエス様の一番弟子になったペトロは、元々ガリラヤ湖畔のカファルナウムという町で、魚を獲る漁師をしていました。イエス様に従うようになってからも、ペトロはカファルナウムの家をそのままにしていたようです。そしてその家には、ペトロの姑と一緒に住んでいました。

まずペトロに妻がいたということに、驚いた方もおられるんじゃないでしょうか。あまり語られていませんが、新約聖書のコリントの信徒への手紙でも、使徒パウロがペトロとその妻について触れています。

「ケファ」というあだ名で呼ばれていたペト

口は、どうやら同じ信仰を持つ妻と一緒に伝道して回っていたようです。このペトロの妻のお母さん、姑にあたる女性がペトロの家に住んでいるということは、彼女はおそらく夫に先立たれたのでしょう。そうでなければ、姑はペトロの妻の実家にいたはずですから。

しかもこの姑には、娘夫婦の他に頼れる親族がいなかったようです。当時のイスラエル社会は家父長制、つまり成人した男性を中心にして、それぞれの家が形作られていました。

女性たちは、父親や夫や息子といった身内の男性を通してでないと、社会に属することができなかったんです。

ですから夫を亡くした女性の立場は、現代の私たちが考えるよりもずっと弱くて、心許ない（こころもとない）ものでした。

そんな「やもめ」と呼ばれる女性たちを保護するようにと、律法は命じています。それはつまり、保護されなければとても女性一人で生きていけない社会だった、ということです。

自分の息子がいたら、あるいは父親や兄がいる実家があったら、この姑はわざわざ娘夫婦の家に住んだりしないで、そちらに身を寄せていたでしょう。どういう事情があったかはわかりませんが、とにかく彼女は、娘の夫であるペトロの家に住むほかない身の上だったようです。

どんなに肩身の狭い思いをしながら、この姑は日々暮らしていたんでしょうか。せめて邪魔にならないように、娘と義理の息子に迷惑をかけないように。そうやって、彼女はペトロの家で毎日気を遣いながら、あれこれ家事を引き受けて暮らしていたのだと思います。

そんな状況の中で、熱を出して寝込んでしまっ

たのだとしたら。体のしんどさだけでなく、この姑はきっと焦りと申し訳なさで心をいっぱいにしなから、寝床に横たわっていたんじゃないでしょうか。早く治さなきゃ、娘たちにますます迷惑をかけてしまう。「どうしよう、どうしよう」と、きっと泣きたいような気持ちで、彼女は熱に浮かされて苦しんでいました。そこに、イエス様がやって来られたんです。

劇的な出会いの様子も、感動的な言葉も、何も伝えられてはいません。ただひょっこりとイエス様が家に入って来られて、この姑の様子をご覧になって、寝込んでいる彼女の手に触りました。イエス様が触ると熱が去って、癒やされた姑は起き上がって、イエス様をもてなした。そう告げて、この短い癒しのエピソードは締めくくられています。癒したイエス様も、癒やされた姑も、それを見ていたはずのペトロとその妻も、誰も一言も話さないままです。

イエス様の手が触れた時、ペトロの姑の熱病は癒やされた。伝えられているのは、ただそれだけです。でもきっと、それだけじゃありませんでした。

寝込んでいた姑の手に触れることで、イエス様は彼女の焦りとか申し訳なさとか、泣きたくなるような情けなさも、一緒に癒してくださったんでしょう。

先にイエス様に癒やされた重い皮膚病の人や、ローマ軍の百人隊長の僕に比べたら、このペトロの姑の病気は、特に重いものでもなかったようです。熱病はありふれていましたし、わざわざイエス様が癒やさなくても、おと

なく何日か寝ていれば治るぐらいのものだったかもしれません。実際、ペトロ夫婦も特に「うちのお母さんを癒してください」と、イエス様に頼んだ様子もありません。

周りから見れば大したことはないけれど、でも寝込んでしまった姑本人にとっては、きっと情けなくて申し訳なくて、いたたまれない状況でした。彼女のその苦しさ、いたたまれなさを、イエス様は癒やされたんです。

あなたが自分をどう思っている、神様はあなたを愛しておられる。その愛の「しるし」として、イエス様はペトロの姑を癒やされました。だからこの姑は、癒やされるや否や起き上がって、他のどんなことよりも先に、精いっぱいイエス様をもてなしたのだと思います。

体だけじゃなくて心も丸ごと救い出してくださった、イエス様への感謝を込めて。

<朝も夕も主は働かれる>

古代イスラエルの食事は、朝または昼のごんと、夕ごはんの2回だったそうです。なので、癒やされて起き上がった姑がイエス様をもてなしたのは、たぶん朝ごはんか昼ごはんだったんでしょうね。

夕方になると、イエス様が来ていることを聞きつけた人々が、悪霊に取り憑かれた人を 大勢、イエス様のところに連れて来ました。

ペトロの家に来て、姑の病気を癒して、もてなしを受けて、イエス様はやっと一息ついたぐらいのところだったでしょう。それも早い時間からだったらともかく、夕方になってから大勢で押し寄せるなんて、遠慮も何もあったものじゃありません。悪霊に取り憑かれた人は、ひきつけを起こして苦しんだり、叫んで暴れたりして、本人も周

りも大変ですが、すぐに命に関わるということとは少なかったはずでした。

「今日は遅いし、もう疲れてるから、また明日出直してきなさい」と言っただけなのに、でもイエス様はそうはなさいません。

休む暇もなく、イエス様は一人一人に言葉をかけて悪霊を追い出して、病人たちをみんな癒やされました。周りから見れば、「明日でもいいじゃないか」と思うぐらいのことだったかもしれません。

でも本人たちにとっては、遠慮も何もできないぐらい苦しくて悲しくて、だから必死でイエス様に助けを求めて来た。そのことを、イエス様はわかっておられたからです。

悪霊に取り憑かれて、叫び声をあげてのたうち回る人たちは、誰にも受け入れてもらえない孤独の辛さを抱えていたでしょう。神様から引き離されて、悪霊に支配されているという恐怖もあったはずです。

その家族や周りの人たちは、どうにもしてあげられない無力感に苦しんでいたでしょう。病気を患う人たちは、「これは神様からの罰だ」という当時の価値観に囚われていました。ペトロの姑と同じように、自分が情けなくて、悲しくて、どうしようもない。そんな人々のやるせなさ、いたたまれなさも丸ごと癒すために、イエス様は誰も追い返さないで、一人一人に向き合われたんじゃないでしょうか。彼ら彼女らが自分をどう思っている、神様は彼ら彼女らをみんな愛しておられる。その愛を伝える「しるし」として。

大勢連れて来られたということは、癒すのにもきっと、かなりの時間がかかったはずで

す。夕方から癒し始めたんですから、途中で日が暮れて、夜になってしまったでしょう。この時代、一日は日没から始まりました。

つまりイエス様の癒しは、日をまたいで続けられたということになります。朝も夕も、人々を丸ごと癒して、神様の愛を示された。このイエス様の姿は、旧約聖書が伝える神様のあり方を思い出させます。

朝も夕も、休むことなく私たちの間で働かれる神様を、旧約聖書は何度も繰り返して私たちに伝えていきます。

出エジプトの物語は、主なる神様が昼も夜もイスラエルの民を導いて行かれた、その様子をこう描きました。

「昼は雲の柱が、夜は火の柱が、
民の先頭を離れることはなかった。」
(出エジプト記13:22)

そして詩篇の詩人は、こんな言葉で神様のあり方を宣言しています。

「見よ、イスラエルを見守る方は、
まどろむことなく、眠ることもない。
主はあなたを見守る方、
あなたを覆う陰、あなたの右にいます方」
(詩篇121:4-5)

私たち人間は、休みなく働き続けることはできません。どんなに情熱を持って、どんなに素晴らしいことに励んでいても、休まなかったらどこかで限界がきて、動けなくなってしまうでしょう。疲れるし、弱るし、時には病気や怪我もします。体にも

心にもしんどさを抱えて、情けなくて悲しくてどうしようもなくなる時が、誰の人生にもあるんじゃないでしょうか。

そんな私たちの真ただ中で、神様は朝も夕も働いておられます。昼も夜も、私たちの先頭に立って、神様の愛が示す方向へ導いてくださいます。まどろむことなく、眠ることなく、一人一人を見守って、働きかけてくださいます。この神様の愛の「しるし」として、イエス様は私たちの世界に来られて、神の国を伝えて、人々を癒して、十字架で死んでよみがえられました。今この時も、イエス様は聖霊によって私たちの間におられ、朝も夕も私たちに語りかけて、私たちの日々と一緒に歩んでくださっています。

だから私たちは、疲れてつまずいて倒れてしまう時も、イエス様に癒やされてまた立ち上がることができるんです。

朝も夕も休むことなく、私たち一人一人を愛してくださっている神様を、いつだって私たちは信じて、期待して、頼っていいんです。

今日から始まる新しい一週間の、朝も夕もどんな時も、神様の愛が私たちを覆っています。そのことを忘れずに、今日もこの礼拝の場所から、ご一緒に歩き出していきましょう。昼も夜も、私たちの前に立って進まれる神様に信頼して、従っていけますように。

お祈りいたします。